

平成27年度 京都市美観風致審議会

第4回 景観専門小委員会

国立京都国際会館増築計画について  
( 諮 問 )

平成27年 08月







# 設計方針

これまで50年間大切に守られてきた国立京都国際会館の設計思想をふまえ、これからの50年につなぐデザインをめざします

## 1-01 コンセプト

### 既存建築との調和と革新

既存イベントホールの構成を尊重し、ホールの肩の高さから下を基壇と考え、そこから上を屋根と捉えます。基壇部分は形状、質感など、既存イベントホール基壇部分と調和したデザインとします。一方屋根部分に関しては、開館50年という時間の経過を捉え、現代の技術とセンスを存分に発揮できる 現代的なデザインをめざします。

### 豊かな自然環境に協調するデザイン

比叡山や宝ヶ池等、計画地は恵まれた自然環境に囲まれています。屋根のガラスの局部ダブルスキンはその透明感で視線を通し、周辺環境に溶け込み、先進性と調和性を表現します。

### 多様性のある空間構成

連絡歩廊を 縁側、ホワイエを 入側、展示ホールを お座敷になぞらえ、日本建築の「場」の構成を意識したストーリーを連絡歩廊から展示ホールにかけて創出します。大空間を有しながら、多様な場を感じられる空間構成とします。



前面道路西側から見た外観イメージ(視点場は次々ページ参照)



# 設計方針

## 1-02-1 既存建築との調和と革新

### 配置計画の調和

イベントホールと本館の建築群は岩倉川によって適度に分離され、それぞれの敷地にふさわしい形態を与えられています。本計画では、既存イベントホールと軸線をそろえた配置とし、イベントホール側の敷地での調和を図りながら本館建物との共通性にも配慮した設計を行います。

### フォルム構成の調和

既存イベントホールを完全に保持したまま、増築棟を計画します。既存イベントホールの肩の高さから下を基壇と考え、そこから上を屋根と捉え、その構成を尊重します。増築棟においても基壇部分は、外壁ラインおよびパラペット高さの踏襲により、アイレベルにおける輪郭の調和を図ります。

### 細部のディテールと空間のディテール

大谷幸夫の設計の特徴として特有の造形力による「細部のディテール」と多様な空間の創出による「空間のディテール」があげられます。本計画においては、細部のディテールを踏襲することによる既存施設との調和ではなく、空間のディテールの考え方を踏襲して、ホワイエ内のラウンジなどにその手法を取り入れることで空間体感の調和を図ります。

### 屋根のデザイン

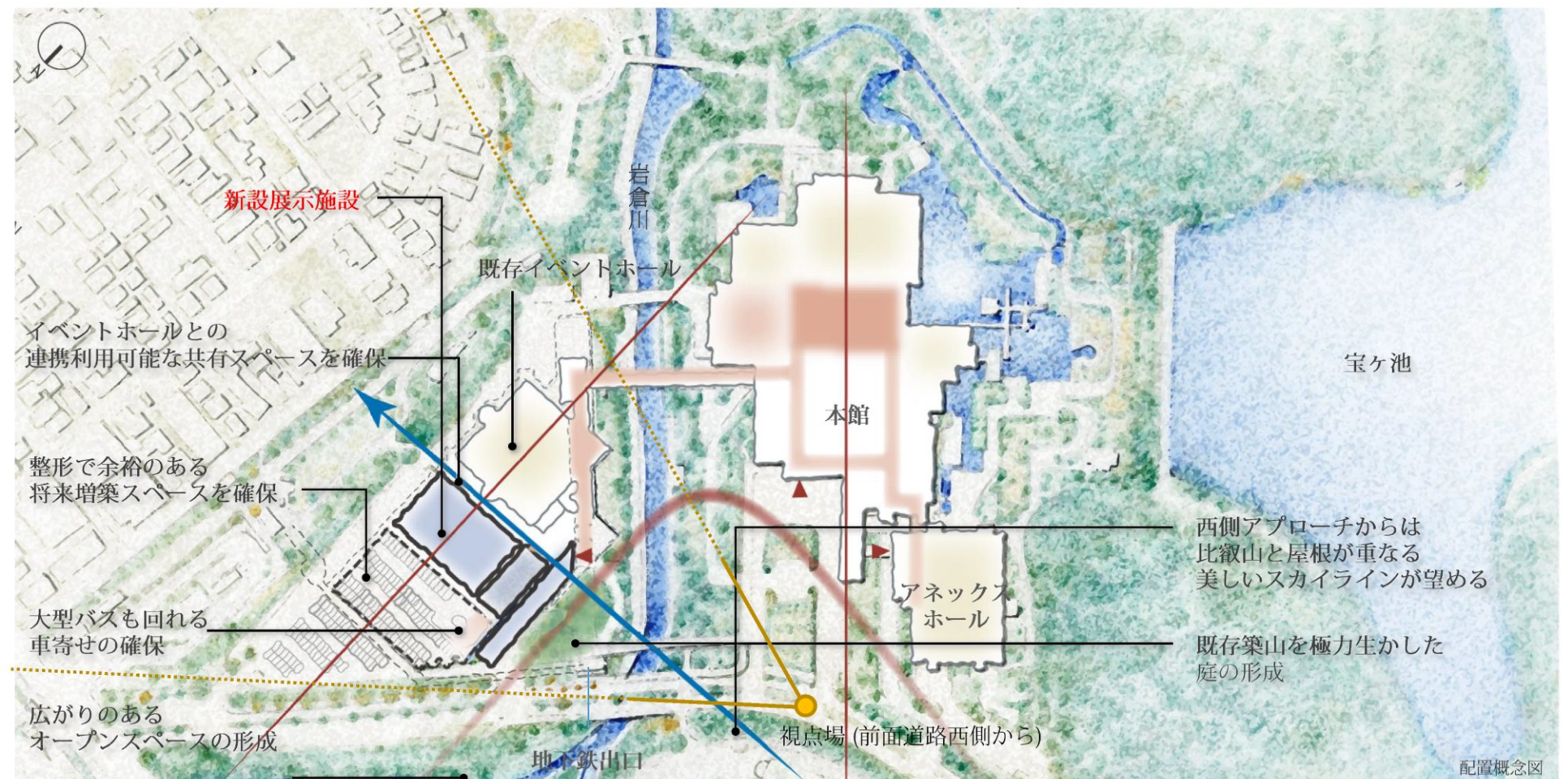
屋根部分に関しては、比叡山を意識した既存イベントホールの求心的な方形の屋根を引き立てるように、可能な限りフラットなもので形成します。その中で、開館50年という時間の経過を捉え、現代の技術とセンスを存分に発揮できる 現代的なデザインをめざします。

### 「緑側」連絡歩廊のデザイン

連絡歩廊は半屋外とするとともに環境制御装置として可変性のある建具を整備します。

### 新旧の対峙

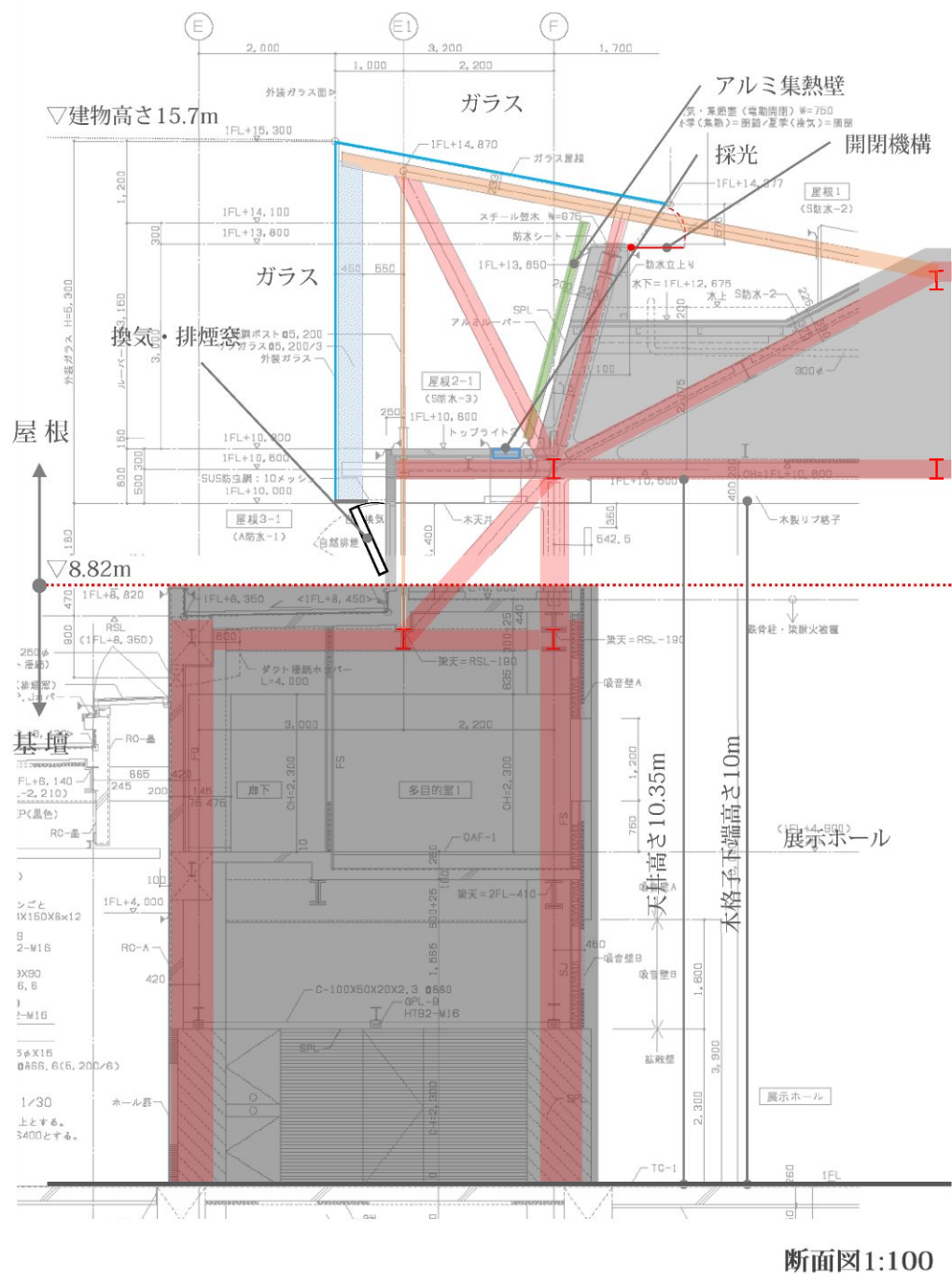
既存イベントホールと増築棟は、将来計画用地を確保しつつ、最大限の離隔距離（6m程度）を確保します。新しい壁面は、ガラスや研磨セメント版等の反射性を持つ材料を検討します。その反射性は、彫刻的な既存ファサードを柔らかく映しこみ、常に今の既存イベントホールを向い合せ、2つの建物間の圧迫感を軽減します。





# 設計方針

## 1-03-1 豊かな自然環境に協調するデザイン



### 自然および歴史的建築的風土との照応

京都市北部に位置する計画地は、比叡山や宝ヶ池等、恵まれた自然環境に囲まれています。さらに、本館開館から50年の歴史のなかに、京都議定書採択という環境面での歴史が育まれており、展示施設の外観でもそれを表現すべきと考えます。既存イベントホールの方形屋根の頂部にあるガラスの屋根と調和するよう、増築棟の基壇上の屋根部分においてもガラスを利用した環境技術をデザインと併せて導入します。

### 現代の技術を導入し、高い環境性能を実現

屋根の東西部分に、イベントホールの軸線を北側に延伸させた印象を体現するよう、リニア状にガラスのダブルスキンを配置します。このダブルスキンは、冬季の集熱利用の受け皿として、夏季の日射熱を排出するための誘引排気口として、中間期の自然換気口として、さらには自然排煙口、自然採光取り入れ口として機能し、環境性能の高い、呼吸できるホール空間を実現させます。また、その他雨水利用や太陽光発電設備の採用により環境性能を向上させます。

※展示施設建設に伴うCASBEEについてはSを目指します。

- ・自然採光  
LR1 2 自然エネルギーの利用 での評価となり、他の設備と合せてレベル5の評価 (Q1 3.1.3 屋光利用設備 での評価となるが、展示施設では評価対象外)
- ・自然換気  
LR1 2 自然エネルギーの利用 での評価となり、他の設備と合せてレベル5の評価 (Q1 4.2.2 自然換気性能 での評価となるが、展示施設では評価対象外)
- ・空調熱利用  
LR1 2 自然エネルギーの利用 での評価となり、他の設備と合せてレベル5の評価

### ガラス奥の壁の傾きの理由

大谷幸夫が既存本館等で景観、機能等から構造架構を導きだし、その架構をそのまま内観や外観に形態として表現していることを踏襲することが、これまで積み上げてきた考え方に合致すると考えます。この奥の壁の傾きは、景観への圧迫感の低減と、集熱力の向上に繋がります。





# 設計方針

## 1-04-1 多様性のある空間構成

### 日本建築の「場」の構成

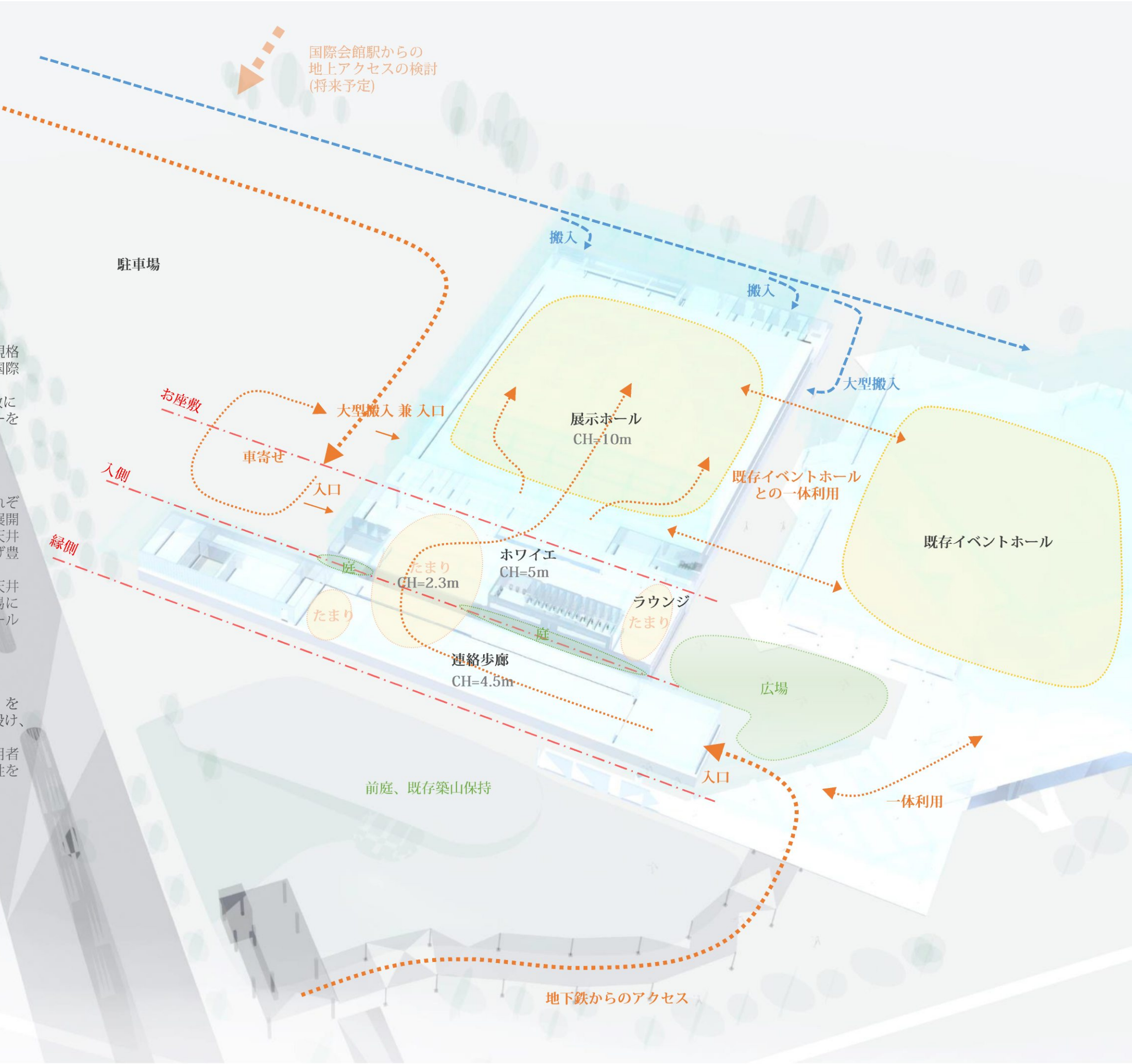
国立京都国際会館では国際的な催事も多く催されます。異文化が触れ合う場として、本館同様増築棟においても規格化された展示施設ではなく、日本の京都にある国立京都国際会館にふさわしい空間が必要と考えます。連絡歩廊を縁側、ホワイエを入側、展示ホールをお座敷になぞらえ、日本建築の「場」の構成を意識したストーリーを連絡歩廊から展示ホールにかけて創出します。

### リズム感のある高さ設定

本館は、エントランス、ロビー、ホワイエ、ホール、それぞれに異なった高さ設定がされておりリズム感のある空間展開が感じられます。本計画においても平面構成と合わせて天井高さにメリハリをつけることで、利用者の視線を少し上げ豊かな空間体験を演出します。展示ホールは、2階建て展示ブースによる展示が可能な天井高さを求められており、また、会場間の運営の連携を容易にするため、建物高さを極力抑えながら既存アネックスホールの天井高さと同じ高さを確保します。  
(次ページおよび断面図参照)

### 飽きの来ない多様性の創出

上段の縁側、入側、お座敷の設定だけではなく「はなれ」を意識した溜まりの場、自然を感じさせる「庭」を随所に設け、より多様性のある空間構成を目指します。本館で行われる国際会議と連動する施設として、同じ利用者が数日間滞在型で利用しても飽きの来ない空間性と演出性を内包します。





# 設計方針



②イメージ(視点場②)



③イメージ(視点場③)



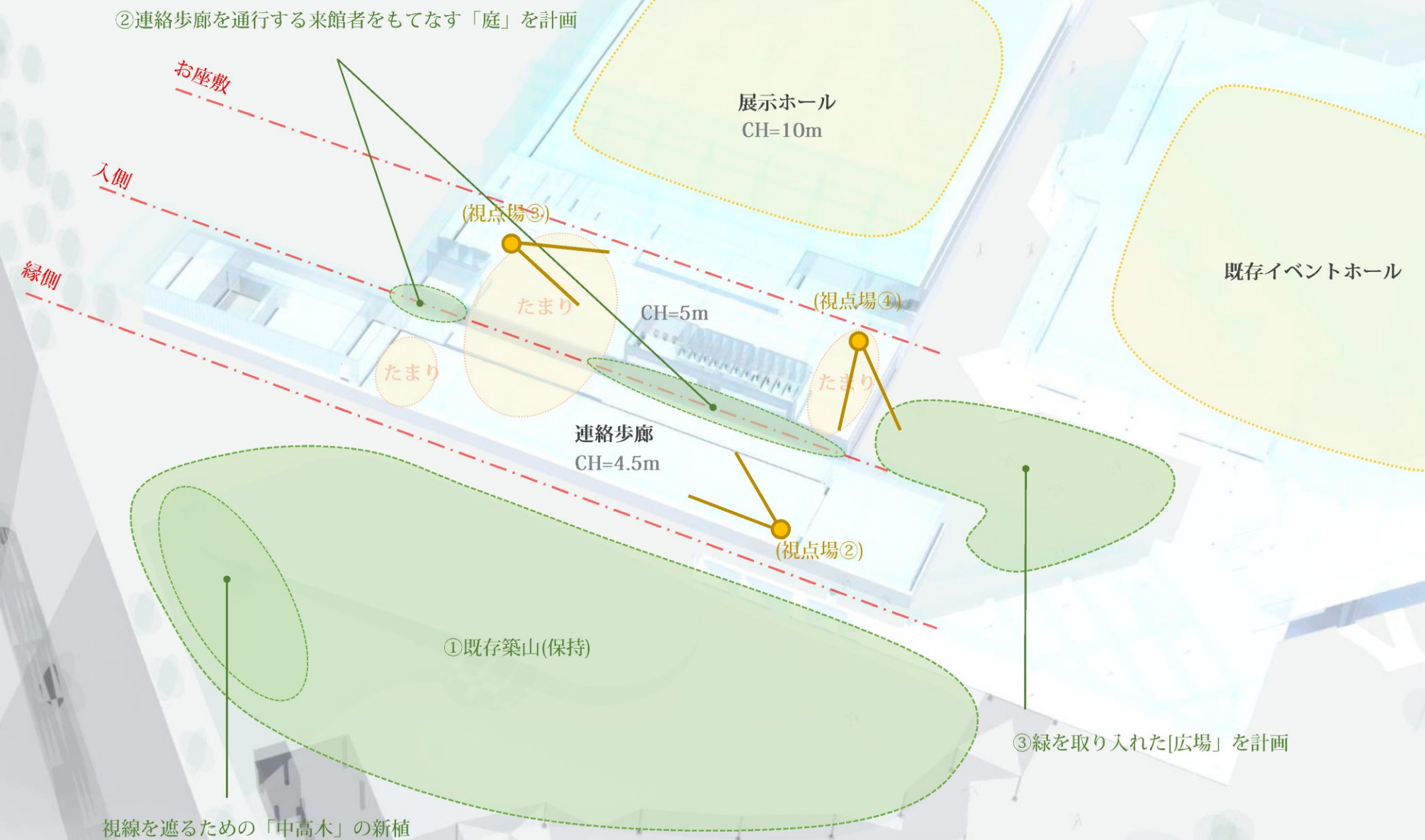
④イメージ(視点場④)

## 1-05-1 緑化計画

### シークエンスが美しい奥へと誘われるランドスケープ

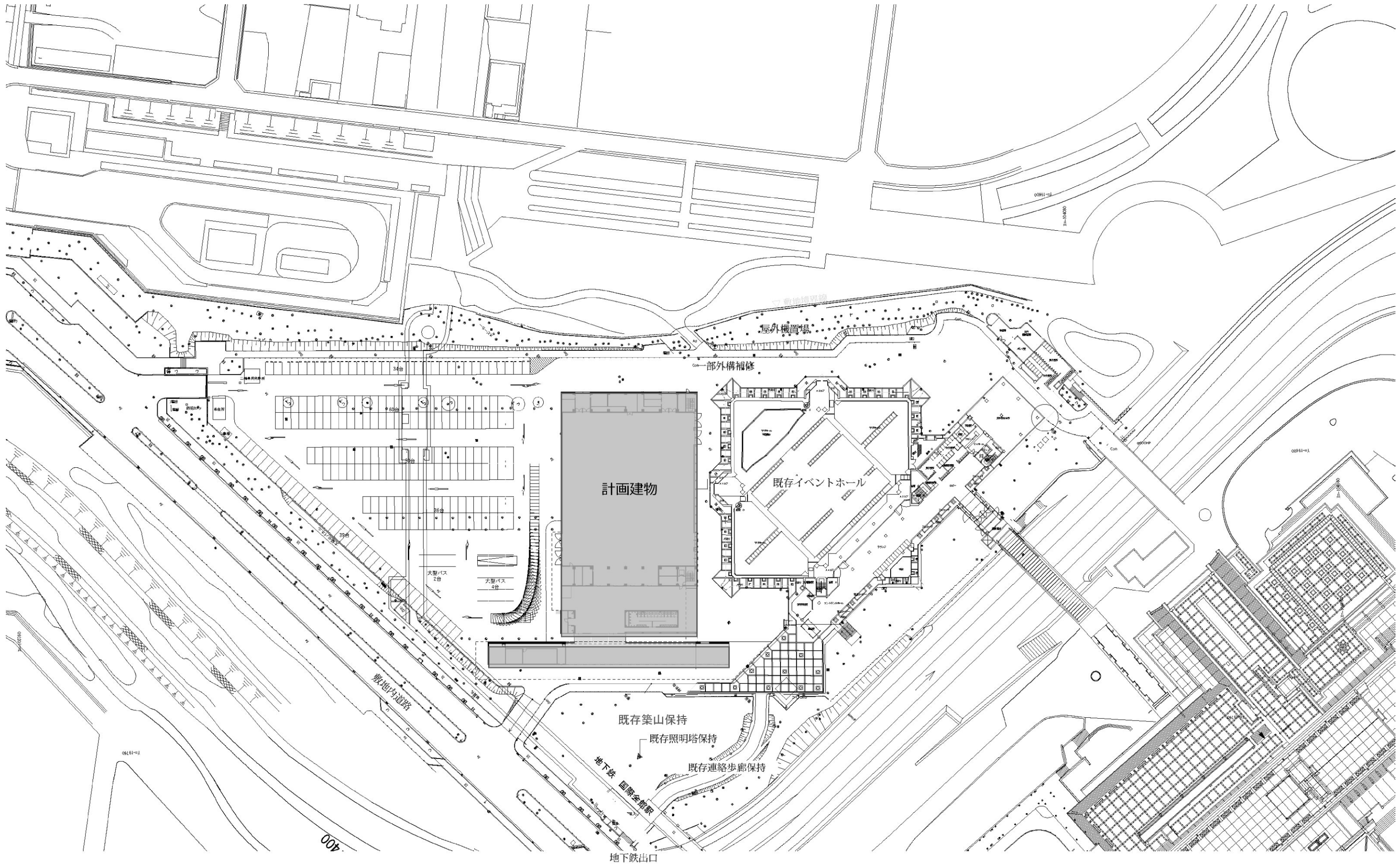
国立京都国際会館の屋外空間は、周囲の自然と照応した水と緑が奥へ奥へと誘う回遊性を創出し、来館者をもてなしています。計画エリアについても橋や連絡通路で既存施設と結ばれ、その動線に沿って美しい風景が次々と現れます。これらは日本庭園の見え隠れといった和の作法を用いた空間構成といえます。

本計画では、既存の築山を保持するとともに、展示施設と連絡歩廊の狭間に来館者をもてなす「庭」を展示施設とイベントホールとの間にホワイエからの緑を取り入れた「広場」を形成します。



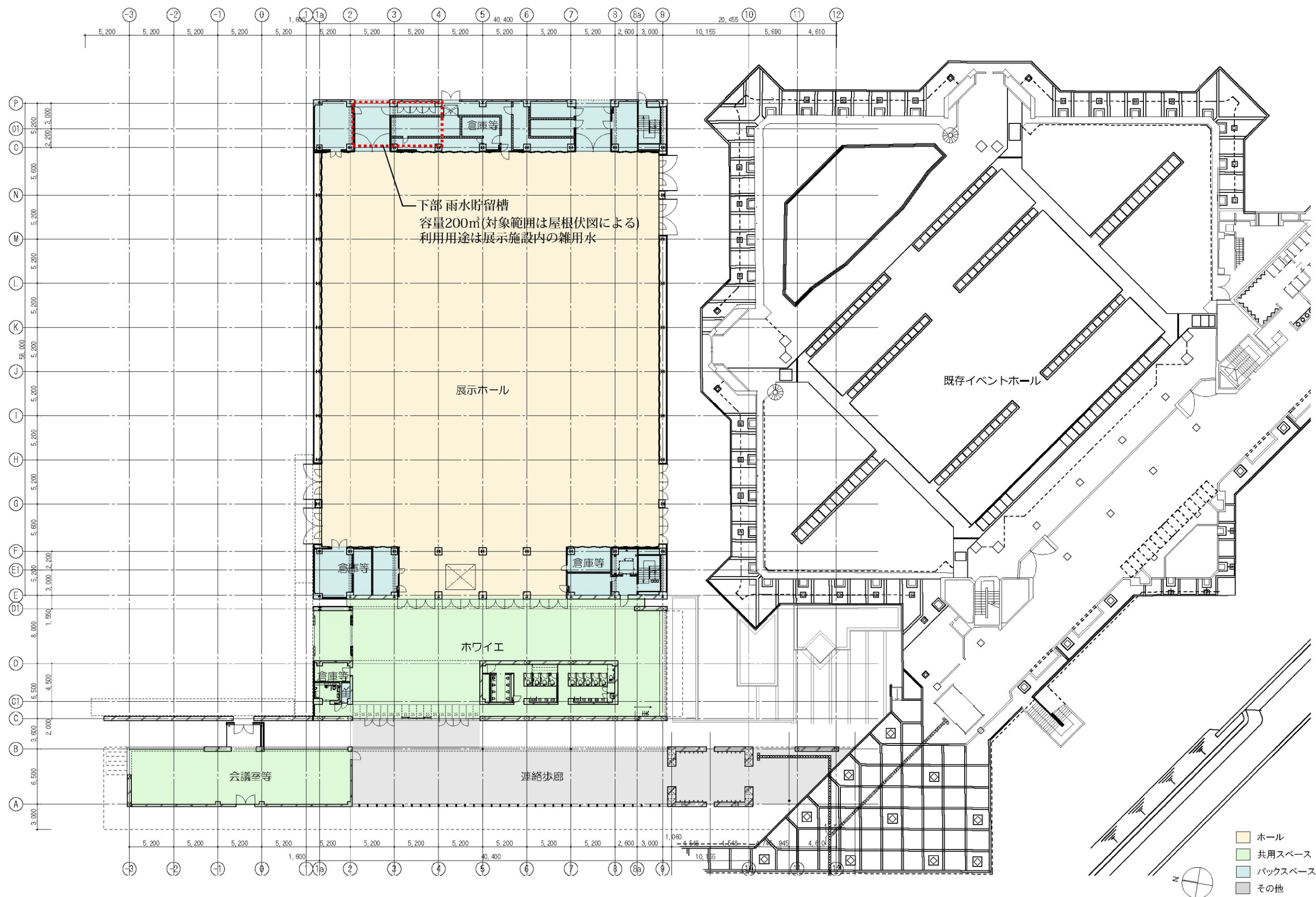
①既存築山





配置図 1:1000





1階平面図 1:400





近景 本館5階より